

欧州の大学との協働でおこなう ノンネイティブ日本語教員養成と 日本語教師のための文法の必要性

中西久実子（京都外国語大学）

【要旨】

本稿では、ブダペスト（ハンガリー）のカーロリ・ガシュパール大学、エトヴェシュ・ロラーンド大学と京都外国語大学の協働でおこなった非日本語母語話者の（ノンネイティブ）日本語教員養成の取組の成果と課題を示す。日本語教員養成の取組としては、2020年8月にオンライン講座を実施した。講座の受講者を対象におこなった調査の結果、ノンネイティブ日本語教師には専門的な文法の知識が必要だというニーズがあることがわかり、受講者から講座の有効性の評価も得られた。しかし、ノンネイティブ日本語教師のための専門的な文法知識の研修など基盤がないという課題も明らかになった。今後は、ノンネイティブ日本語教師のための専門的な文法知識の研修の基盤を作り、日本語文法の解説と日本語教師のための文法の専門用語を提供するなど支援を開始しなければならない。

1. はじめに

1. では、本稿の背景として、日本語教師が不足していて、ニーズに対応できていないという現状を示す。

近年、少子高齢化による就業人口の現象により、日本語教育人材も不足の状態が続いている。実際、京都市内でも非日本語母語話者（以下、ノンネイティブ）を正規雇用の社員として採用する日本語学校が増えてきている。たとえば、中国語母語話者R I氏は、2018年3月に京都外国語大学大学院を修了し、同年4月に京都の専門学校（Kコンピュータ学院）に事務職員として正規採用された。採用時の業務は翻訳や事務であったが、2019年4月からは母語が同じ初級の学習者に日本語を教えるように雇用先から要請されたとのことである。そして、2019年度は、春学期は7コマの授業、秋学期は週3コマの授業を担当した。2020年度はコロナウイルス感染拡大予防のため授業担当を一時休止したが、2021年度からは授業担当を再開するとのことである。R I氏は、日本語教師としての知識も授業の実践の技術もまだまだ勉強したいとのことである。つまり、事務職員として採用されたノンネイティブが日本語教師として勤務する事例が増えているのである。日本語教育の現場では中国語が話せる日本語教師のニーズがあるにもかかわらず、専門知識を有したノンネイティブが不足しているためである。

今後は、日本語教師の不足を解消するため、日本語学習者の中からもノンネイティブ日本語教師を養成し、日本語教師になるノンネイティブに日本語教育の専門知識を修得させる機会を作るべきだと思われる。

2. 問題のありか

2. では、日本語教育で文法が軽視されている現状と、日本語教師のための文法の支援が不十分だ

という問題を指摘する。

近年日本語教育では、コミュニケーションを重視するため、文法はどちらかというと軽視される傾向がある。「もはや文法はいらない」というような極端な意見も聞かれるようになり、日本語教師は文法知識を身につけなくてもいいというように考えられることもあった。文法が軽視されている原因は次のとおりである。

第1の原因は、国際交流基金のJF日本語教育スタンダードでCan-do statementsが整備されてからは、国内外の日本語教育機関でコミュニケーションやCan-doリストを重視する教科書『まるごと』の使用が多くなったことである。コミュニケーションやCan-doリストを重視する教科書では、コミュニケーションに必要な最小限の文法説明は付されているものの、文法体系などはわからないということになっている。そのため、経験の浅い日本語教師が「文法知識についてはさほど詳しい専門知識がなくても授業ができる」と考えてもいたしかたないと言わざるをえない。

第2の原因は、『みんなの日本語』など日本語の総合教科書に付属の文法解説というのも各国語の翻訳版が出版されていることである。それらは内容的に簡易的なものでしかなく、しかも、個々の文型について説明がなされている。授業を実践するだけならば、個々の文型の説明さえわかれば用が足りるので、文法の専門知識が体系的に必要なと感じなくなっているのである。

しかしながら、日本語教師のための文法の支援は不十分である。2019年6月に日本語教育推進法が可決され、国内外において日本語教師になりたい人のための教育や研修などが整ってきている。しかし、まだ地方都市では十分とは言えないことがある。いったん日本語教師になったとしてもどう教えればよいかということが学べる研修も地方都市の小さな日本語学校の日本語教師となると、研修に参加する機会は決して多くはない。

上記の2つの問題があるため、たとえば、経験が浅い日本語教師の場合は、コミュニケーションを重視した教科書『まるごと』を使って日本語は教えられるが、文法について質問されたら答えられないことがある。また、『まるごと』で教えたコミュニケーションのストラテジーがどんな文法を基におこなわれているのか知らないという教師もいる。しかしながら、研修を受ける機会はあまりなく、インターネットや書籍の文法解説を読むにとどまっているのである。

本研究は、Can-doリストを使ってコミュニケーションで何ができるかを積み上げていく授業でも日本語教師として文法知識は有していなければならないという立場に立っている。そして、ノンネイティブ日本語教師のための専門的な文法知識の研修の基盤を作り、日本語文法の解説と日本語教師のための文法の専門用語を提供するなど支援が必要であるということを主張する。

本研究では、日本語教師をめざすノンネイティブの文法知識の基盤作りを支援するため、下記(1)の講座を新設することにした。

(1)

講座名称 京都外国語大学ランゲージセンター生涯学習オンライン講座

「外国人に日本語を教えてみよう<入門>」

開講時期 2021年4月～3月(通年科目)

講座の対象者 日本語教師をめざすノンネイティブ

講座の概要 日本語教師入門となるような日本語文法の講義計24回(春学期12・秋学期12)を対面でおこなう。

ただし、(1)は初めての試みであるため、(2)のようなオンライン講座を試験的に設け、準備をおこなうことにした。オンライン講座のテーマは、動詞、形容詞、時を表す表現、受身、自動詞・他動詞で、日本語教育に不可欠な典型的な文法概念をテーマにした。

講座は国内外のだれでもが容易に参加できるようにオンラインでの開講とし、ブダペスト（ハンガリー）のカーロリ・ガシュパール大学 Eötvös Lóránd Tudományegyetem, エトヴェシュ・ロラード大学 Eotvos Lorand 大学の先生がたにご協力いただいた。

(2)

講座名称 京都外国語大学大学院特別講座「外国人に日本語を教えてみよう〈入門〉」

[講座の対象者] 日本語教師をめざすノンネイティブ

[開講時期] 2020年8月16日～29日 [受講料] 無料

[講座の対象者] 国内外の一般社会人、学生

[講座の内容] 日本語教師入門となるような日本語文法の講義計5回（zoom使用）

[スタッフ（敬称略）]

青木さやか（講師，京都文化日本語学校非常勤講師，京都橘大学非常勤講師）

寺田友子（講師，京都外国語大学非常勤講師）

井元麻美（オンラインサポート，国際交流基金ニューデリー日本文化センター日本語専門家）

若井誠二（カーロリ・ガシュパール大学教員，ハンガリーの受講者統括）

内川かずみ（エトヴェシュ・ロラード大学教員，ハンガリーの受講者支援）

中西久実子（日本人参加者とスタッフの統括・監修・コーディネータ，京都外国語大学教員）

[教科書] 中西久実子・坂口昌子・大谷つかさ・寺田友子（2020）『使える日本語文法ガイドブックーやさしい日本語で教室と文法をつなぐ』ひつじ書房。

本稿では、欧州の大学と協働でおこなった(2)のオンライン講座の成果をもとに、下記A Bのことを主張する。

- A. 日本語教師志望のノンネイティブは、日本語文法の知識を体系的に身につける機会を必要としている。
- B. 日本語教師志望のノンネイティブを支援するための日本語文法を整備する必要がある。そのために、まず各国語の日本語文法解説や文法用語を整備すべきである。

本稿の構成は次のとおりである。3. ではオンライン講座の概要を示す。4. では上記Aを主張する。5. では、上記Bを主張する。最後に6. では、本稿のまとめと今後の課題を示す。

3. オンライン講座の概要

本研究では、日本語教員養成の取組として、2020年8月に日本語教師志望のノンネイティブを支援するためのオンライン講座を実施した。オンライン講座は下記(3)の①～③のような反転授業の手法でおこなった。

(3)

①受講者は、オンデマンドのビデオで教科書の内容について視聴する。

②受講者は Quizlet で言語学の専門用語（例、瞬間動詞、アスペクトなど）についてドリルをして、ビデオの中で出題された課題について自分の考えをまとめておく。

③同期のオンライン講座は、zoom で配信する。毎回、講師の講義（20分ほど）を聞いた後、他の受講者と②の課題についてディスカッションする。

オンライン講座の受講者の詳細は表1のとおりである。多くは、日本語教師志望者、または、大学院進学を目指した学部生や留学生であった。ノンネイティブ対象の講座ではあったが、実際には日本語母語話者（以下、ネイティブ）の受講者も受け入れた。

表1 オンライン講座の受講者

国籍	受講者の数
ハンガリー	6名
中国	4名（うち日本語教師1名）
韓国	2名
タイ	1名
日本	9名（うち日本語教師4名）
合計	22名

オンライン講座の内容は表2のとおりである。

表2 オンライン授業の内容

	オンデマンドビデオ	講師	テーマ	内容と時間配分
第1回 8月15（土） 20:00-20:40	8月8日 13:00 公開	T T	動詞	1. 講師自己紹介（5分） 2. グループ発表, アイスブレイキング（10分） 3. グループで自己紹介（10分） 4. グループディスカッション（10分） 5. 全体共有（10分）
第2回 8月16（日） 20:00-20:40		A S	形容詞	1. 講師自己紹介（5分） 2. グループディスカッション前の導入（10分） 3. グループディスカッション（10分） 4. 全体共有（15分）
第3回 8月22（土） 20:00-20:40	8月18日 13:00 公開	T T	時を表す表現	1. ビデオの内容確認（10分） 2. グループディスカッション（18分） 3. グループディスカッションの内容共有（15分） 4. まとめ・振り返り（2分）
第4回 8月23（日）		A S	受身	1. 文法は何のために勉強する？（8分） 2. 受身のポイント（5分）

20:00-20:40				3. グループディスカッション (16分) 4. 全体共有 (15分)
第5回 8月29(土) 20:00-20:40	8月25日13:00公 開	T T	自動詞 他動詞	1. 振り返り学習 (20分) 2. 全体で振り返り (12分) 3. グループ相談会・懇親会 (13分)

4. アンケートと講座の実践でわかったこと：日本語教師には文法の知識が必要である

4. では、日本語教師志望のノンネイティブは、日本語文法の知識を体系的に身につけられる機会を必要としているということを示す。講座の受講者を対象におこなった調査の結果、ノンネイティブ日本語教師には専門的な文法の知識が必要だというニーズがあることがわかり、受講者から講座の有効性の評価も得られた。

4. 1 オンライン講座の事前アンケート調査からわかる文法の必要性

オンライン講座の受講者 22 名に講座の前にアンケート調査をおこなった。結果は表 3 に示す。

表 3 オンライン講座の受講者に対する事前アンケート調査の結果 (有効回答 21 名)

	100%賛成	70%賛成	50%賛成	反対
1)外国語学習の中で一番大切なのは、文法だ。	0	9(42.8%),	10(47.6%)	2(9.5%)
2)コミュニケーションを教えることは大切だが、日本語の先生には文法の知識が必要だ。	13(61.9%)	7(33.3%)	1(4.8%)	0
3)コミュニケーションを教える先生も、質問されたら文法を詳しく説明したほうがいい。	11(52.4%)	8(38.1%)	2(9.5%)	0
4)コミュニケーション場面で使える日本語を教えるべきだ	10(47.6%)	10(47.6%)	1(4.8%)	0
5)文法 1 つ 1 つを「いつ、だれに、どのように使えばいいか」も教えらる知識が必要だ。	12(57.1%)	6(28.6%)	3(14.3%)	0
6)ノンネイティブ日本語教師は、媒介語(英語など)を使って文法を説明すべきだ。	4(19.0%)	6(28.6%)	10(47.6%)	1(4.8%)
7)ノンネイティブ日本語教師は、日本語を使って授業をすべきだ。	1(4.8%)	7(33.3%)	10(47.6%)	3(14.3%)

注目したいのは質問 2 「コミュニケーションを教えることは大切だが、日本語の先生には文法の知識が必要だ。」である。この質問には 95%ほどの受講者が 70%以上の賛成を示した。このことから、日本語教師志望者は、日本語文法の知識を体系的に身につけられる機会を必要としていると言える。

4. 2 オンライン講座の実践からわかる文法の必要性

前項で示した表 1 の結果、日本語教師志望のノンネイティブは文法の体系的な知識が必要と感じていることがわかった。さらに、オンライン講座の受講者から授業のディスカッションの中で下記(4)のような証言が得られた。この受講者は現在日本語を教えているとのことである。

- (4) 「ハンガリー語では受身は使わないほうがいい、なぜか理由は説明できないけれど。」
(第4回オンライン講座 (2020年8月23日での発言) ME (ブダペストの大学院生))

(4)からわかるように、母語であるハンガリー語で受身は使わないという現象があることは指摘できるが、それについて言語学的見地から分析的に話すことはできないことがあるのである。(4)の証言から、日本語教師志望のノンネイティブは、文法の知識が必要と感じてはいるが、実際には知識は不足していることがうかがえる。

多くのノンネイティブの日本語教師は、日本語教科書『みんなの日本語 初級 I 本冊』『げんき』などの教科書に付属している文法解説を母語で読んで理解できるが、それを母語の文法体系と対照できるほど言語学の知識はない。この問題を解消するためにも、文法知識を体系的に身につけられる機会を提供すべきなのである。

4. 3 先行研究でも指摘されている文法の必要性

4. 3では、先行研究でも日本語教師のための文法が整備される必要があるとの指摘があることを示す。

日本語教師の資格制度の創出について、日本語教育推進法では、「外国人等に日本語を教える日本語教師の資質・能力を確認し、証明するための資格を定めて(中略)、日本語教師の資格の名称は「公認日本語教師」とする。」とされている。そして、公認日本語教師の資格取得要件(試験)としては、下記のものが示されている。

- (1)世界と日本の社会と文化 (2)日本の在留外国人施策 (3)多文化共生
- (4)日本語教育史 (5)言語政策 (6)日本語の試験 (7)世界と日本の日本語教育事情
- (8)社会言語学 (9)言語政策と「ことば」 (10)コミュニケーションストラテジー
- (11)待遇・敬意表現 (12)言語・非言語行動 (13)多文化・多言語主義 (14)談話理解
- (15)言語学習 (16)習得過程 (17)学習ストラテジー (18)異文化受容・適応
- (19)日本語の学習・教育の情意的側面 (20)日本語教師の資質・能力
- (21)日本語教育プログラムの理解と実践 (22)教室・言語環境の設定 (23)コースデザイン
- (24)教授法 (25)教材分析・作成・開発 (26)評価法 (27)授業計画 (28)教育実習
- (29)中間言語分析 (30)授業分析・自己点検能力 (31)目的・対象別日本語教育法
- (32)異文化間教育 (33)異文化コミュニケーション (34)コミュニケーション教育
- (35)日本語教育とICT (36)著作権 (37)一般言語学 (38)対照言語学
- (39)日本語教育のための日本語分析 (40)日本語教育のための音韻・音声体系
- (41)日本語教育のための文字と表記 (42)日本語教育のための形態・語彙体系
- (43)日本語教育のための文法体系 (44)日本語教育のための意味体系
- (45)日本語教育のための語用論的規範 (46)受容・理解能力 (47)言語運用能力 (48)社会文化能力
- (49)対人関係能力 (50)異文化調整能力

上記の太字部分について佐藤香織・菊池律之(2019)で(5)のように述べられている。

(5) ここで着目したいのが、必須の教育内容の(39)～(49)である。「日本語教育のための日本語分析」「日本語教育のための音韻・音声体系」などと、「日本語教育のための」という表現が明確に使われている。これは、これまでの養成課程の国語学、日本語学的内容にとどまり、本稿で主張してきたような、模擬実習や教育実習の際にその知識を学習者にどのように伝えるかという訓練までは行うことができていなかったことを暗に示しているのではないだろうか。

(佐藤香織・菊池律之 (2019:142-143))

特に本稿の主張と関連する教育内容は、(39)「日本語教育のための日本語分析」と(43)「日本語教育のための文法体系」である。今後はこれらを具体的にどのように教えていくかということ各大学がより真剣に考えていく必要があるといえよう。

(佐藤香織・菊池律之 (2019:144))

つまり、実際に何が日本語教師にとって必要な文法なのかはまだ明らかではないということである。実際、日本語教師のための文法解説書として庵功雄ほか(2000)(2001)や市川保子(2005)(2007)などがあるが、N3～N4の日本語教師には難解すぎて読めないことが多い。やはり、ノンネイティブの日本語教師志望の学生は文法の体系的な知識が不足していることがあるので、文法知識を体系的に身につけられる機会を提供すべきなのである。

5. 日本語教師に必要な体系的な文法と文法用語の翻訳

5. では、日本語教師志望のノンネイティブを支援するための日本語文法を整備する必要があるということ述べる。

本研究では、ノンネイティブ日本語教師志望者の支援のため、オンライン講座を実施し、文法の専門知識への理解度とニーズを調べた。その結果、日本語教師志望者は、日本語文法の知識を体系的に身につけられる機会を必要としていることがわかった。このニーズを満たすためにすぐに完全な講座を用意することは難しい。なぜならば、ノンネイティブが容易に読める文法の書籍や用語などの整備がなされていないからである。ノンネイティブ日本語教師のための研修はなされてはいるが、専門的な文法知識についてはまだ不十分であると言わざるを得ない。

今後は、ノンネイティブ日本語教師のための専門的な文法知識の研修の基盤を作り、日本語文法の解説と専門用語を日本語教師のために提供するなど支援を開始しなければならない。

本研究では、支援の一環として下記(6)の書籍を作成した。この書籍は文法の体系的な専門知識がノンネイティブにも容易に読める「やさしい日本語」で書かれている。(7)に示す目次からわかるとおり、その文法を使えば何が「できる」ようになるかが示されている。

(6)

中西久実子・坂口昌子・大谷つかさ・寺田友子(2020)『使える日本語文法ガイドブックーやさしい日本語で教室と文法をつなぐー』ひつじ書房。

(7)

Chapter 1 格助詞 - 自分のことについて説明できる -

Chapter 2 動詞 - 「ありますか」で店に問い合わせができる -

- Chapter 3 肯否テンス「いつするか・しないか」説明できる -
- Chapter 4 形容詞 - 人やものの説明がくわしくできる -
- Chapter 5 名詞修飾 - ほかのものと区別してくわしく説明できる -
- Chapter 6 時を表す表現 - 前後の関係と時間の範囲が説明できる -
- Chapter 7 可能表現 - できないことをやわらかく伝える -
- Chapter 8 引用表現 - 他の人のことばを伝えることができる -
- Chapter 9 気持ちを表す表現 - 思っていることが伝えられる -
- Chapter10 「は」と「が」 - 長い文章で一貫性のある説明ができる -
- Chapter11 理由を表す表現理由を言ってスムーズにお願いや説明ができる
- Chapter12 2つのものの接続 - 2つのことの関係がうまく伝えられる -
- Chapter13 アスペクト - まだ終わっていないことが伝えられる -
- Chapter14 自動詞・他動詞 - 困ったことについて説明できる -
- Chapter15 受身 - 論文やレポートで客観的な表現ができる -
- Chapter16 使役 - 丁寧をお願いできる -
- Chapter17 授受 - 丁寧をお願いしたり, 感謝を伝えたりできる -
- Chapter18 条件 - 将来の予定の順番を説明したり, 不満を伝えたりできる -
- Chapter19 のだ - 場面の様子と結びつけてお願いや説明ができる -
- Chapter20 敬語 - 丁寧に話してスムーズにコミュニケーションできる

本研究では、インターネット上 (<https://nihongootasuke.wixsite.com/nonst>) で上記の書籍とオンライン講座でノンネイティブ日本語教師志望者を支援していく。支援は、オンライン講座の継続と、専門用語の翻訳などを予定している。まず、2020年度から2021年度にかけては、この書籍の巻末にある日本語教育の専門用語の用語集を各国語に翻訳する取組をおこなう。

専門用語の翻訳をしている理由は次のとおりである。現職のノンネイティブの日本語教師は、『みんなの日本語 初級 I 本冊』『げんき』などの教科書に付属している文法解説を外国語で読むだけで教壇に立っていることが多いが、その文法解説には自動詞、完了など言語学の専門用語が入っている。文法の専門用語の翻訳が整備されれば、ノンネイティブの日本語文法への理解度も深まると考えている。

本研究では、オンライン講座用にオンデマンドのビデオを作成したが、その字幕にハンガリー語の翻訳をつけて専門用語にハンガリー語の翻訳をつけ、インターネット上 (<https://nihongootasuke.wixsite.com/nonst>) で公開することを予定している。

6. おわりに

本稿では、下記A Bのことを主張した。

- A. ノンネイティブの日本語教師志望の学生は、日本語文法の知識を体系的に身につけられる機会を必要としている。
- B. ノンネイティブの日本語教師志望を支援するための日本語文法を整備する必要がある。そのために、まず各国語の日本語文法解説や文法用語を整備すべきである。

専門知識を身につけられるようにするこの講座をきっかけに、オンラインで教師志望の人のネットワークができれば、「教師同士がつながり、地域社会とつながり、さらに日本語学校間でつながることで学び合う教師集団が生まれ、教師力の向上が図れる（嶋田和子（2019:36）」）。

謝辞

カーロリ・ガシュパール大学 Eötvös Lóránd Tudományegyetem の若井誠二先生，エトヴェシュ・ロランド大学 Eotvos Lorand 大学の内川かずみ先生，小野久禎先生，ブダペスト商科大学の佐藤紀子先生にはオンライン講座の実施に際してご協力いただきました。ここに期してお礼を申し上げます。

参考文献

- 荒川洋平（2016）『日本語教育のスタートライン』東京：スリーエーネットワーク。
- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘（2000）『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』東京：スリーエーネットワーク。
- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘（2001）『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』東京：スリーエーネットワーク。
- 市川保子（2005）『初級日本語文法と教え方のポイント』東京：スリーエーネットワーク。
- 市川保子（2007）『中級日本語文法と教え方のポイント』東京：スリーエーネットワーク。
- 上田和子（2019）「日本語教員養成プログラムの検証—教育実習記述の分析から—」『武庫川女子大学紀要. 人文・社会科学編』66, p.1-11.
- 佐藤香織・菊池律之（2019）「日本語教員養成課程における教育実習のありかたに関する一考察—課程科目と教育実習の有機的な連携を目指して—」『北海道教育大学紀要. 教育科学編』69-2, pp. 135-145.
- 嶋田和子（2019）「日本語学校における教師研修の課題と可能性—学び合う教師集団とネットワーキング」『日本語教育』172, pp. 33-47, 日本語教育学会。
- 原沢伊都夫（2010）『考えて、解いて、学ぶ日本語教育の文法』東京：スリーエーネットワーク。